弾劾集会や団交

6日 学生部委員会室を破壊

和泉

五・六日和泉校舎で大衆団交が行なわれた。まず五日の団交は、同日予定されていた和泉総団交を学校側が一方的に延期する旨の通告をしたことから始まった。

同日の団交に際して、学生会中執は四日、中教審・大学立法と六項目要求についての質問状を添え、団交を申し入れた。しかし、大学側は質問状に関して、どのように対処していくか、連合教授会で検討しなければならないので十二日以降に団交を持つと通知した。

しかし、学生会は「大学側は話し合いにいつでも応じると言いながら、一方的に延長通告したのは欺瞞である」として、あくまで大衆団交を開くため、理事・学部長の出席を求めて、学生部に出向いたが、学生部長をはじめ学生部は全員不在で、総団交実現の可能性がないままだった。

一方、予定された五日午後三時には和泉六番教室に約二〇〇〇人が集まったが、〝大学側の大衆団交拒否弾劾集会〟に切り換えた。合わせてあくまで団交を要求する学生は、二時間後の五時にも約一〇〇〇人が残り、和泉キャンパスに居合せた教授を集会に呼び、大学などについての見解を質問した。

午後六時三十分、学生に突き出された格好の松田学生部長が、ジラシラした雰囲気の会場へ到着した。そして、この日の団交を学校側が一方的に延期通告した事について「去る二十七日の総団交で、大学側の見解は明らかになっており、無意味な二重団交である。それより連合教授会開催後のもっと進展した段階での団交が有効であり、私としてはどうしようもない」、さらに「その事情を学生の前で説明しようと思っていたが、同会議で学生の前に現われないように言われていたからである」との発言をした。このため会場は騒然とし、学生が壇上につめより一時険悪な事態になった。

学生側は「学生部はパイプと言いながら理事がどこにいるかも知らず、また学生部自身としても学生と連絡をとれない状態でいた自己批判し、学生部を廃止しろ」と主張したが、学生部は一向に誠意をみせず、ヤジと怒号が会場を包むなかで、一行に進展しなかった。

そして十一時三〇分、業をにやした学生側は六日に和泉総団交を設けるよう要求し、それが実現するまでは対学生部団交を行なうと会場を教員室に移し続行した。教員室内には約一〇〇人が参集し、またゲバ棒・フトンなどを持ち込んで緊迫した雰囲気に包まれた。

結局、この対学生部団交は翌朝（六日）午前十時まで続き、「学長は連合教授会を召集し、その席上で学長として団交を持つよう進言する」との確約で終止符が打たれた。

六日午前中の「学生部弾劾集会」に引き続き、十一時から開かれた緊急連合教授会の討論をへて午後三時すぎから第二校舎六番教室で、「和泉地区総団交」が開かれ、二〇〇〇人以上の学生が参集した。

中川高弥学長をはじめ、大学側は十四人が出席、学生側は長崎二学生会委員長代行ら約一〇人が相対した。

五日の団交を拒否したことについて、大学側は「五月二十七日の団交の内容に関して、学生は闘争宣言を発したのではないか」と答えると、「闘争宣言を発したら、では大学側は話しあわないつもりなのか」と食いさがり、団交は冒頭から荒れ模様だった。

約一時間きたえの件でもめ続けた後、学生側は具体的な「六項目要求」の討論に入った。その中で「学館問題」に関して、「ロックアウトの考えはないか」という学生側の質問に対し、中川学長は、「できるだけしたくない」と回答した。しかし、学生側はこの答弁に「それはロックアウトすることもありうるということだ」と机をたたいたりして反発し、会場は騒然とした。

団交は進展もなく続いたが、最後に四月に提出したはずの生田地区の「団交要望書」が、この席上まだ理事者に届いてないことが判明し、学生側は憤慨、大学側を糾弾した。そして、とうとうその要望書が学長のフトコロから出てくるにおよんで、学長は学生側に平身低頭して謝罪した。

十時まえに団交は終了したが、その後約一〇〇人の赤ヘル部隊は和泉キャンパスをデモ行進し、十時十分、第一校舎三階の学生部委員室を封鎖・破壊した。